Japanese Journal of Applied Psychology
2016, Vol. 41, No. 3, 325–326

追　悼

大村政男先生を偲んで

藤田主一（日本体育大学）

日本応用心理学会名誉会員の大村政男先生が，平成27年10月31日にご逝去されました。享年91（満90歳）でした。米寿を過ぎたころから弱られましたが，ご生涯を全うなされました。人格心理学者，性格心理学者として高名な大村先生のご逝去は，わが国の心理学界にとって大きな損失と言わざるを得ません。大村先生の高弟である岡村一成先生（東京富士大学学長）から訃報のお知らせをいただいたとき，公私にわたり深い御恩を受けた私にとりまして，言葉にならないほど強い衝撃を受けました。出会いから今日に至るまで，私の人生に大村先生の存在がいかに大きかったのかを改めて知りました。大村先生と同窓で私の伯父である高嶋正士先生（共立女子大学名誉教授）の勧めもあって，日本大学心理学科への学士編入学を決心したとき，訪問した文理学部本館の階段ですれ違ったのが先生との最初の出会いでした。40年以上も前のことです。それ以来，学部から大学院へ進み，現在教育研究職を得て活動しているのも先生のご指導と温かいまなざしのおかげであり，感謝の念に堪えません。大村先生に教えを受けた方々も，きっと私と同じ気持ちを抱いていることでしょう。

大村政男先生

大村先生の授業や講演などに参加すると，そのリズミカルな口調と人を惹きつける話術に魅了され，あっという間に虜になってしまいます。「大村先生の話を聞いてみたい」というファンに取り囲まれてしまうのです。これが大村心理学の魅力です。しかもその都度に配られる資料は，豊かな写真や楽しいイラストが散りばめられすべて几帳面な手書き文字です。貴重な元原稿は莫大な枚数になるのですが，私はその元原稿の相当数を頂戴して研究室に保存しています。私が学部3年生のとき，4年次必修科目「人格心理学」の授業を教室の一番前の席で1年間（当時は通年授業）聴講しました。本来の4年生になったとき，「この中に昨年自分の授業を聞いた学生がいる。したがって，今年は同じ授業ができない」と仰せになり，まったく新しい資料に基づいた授業を展開されました。中身が異なる「人格心理学」を2年間聴講したのはおそらく私だけかもしれません。今から思えば大変失礼な学生でしたが，それを許してくださった先生の大きさを感じています。

大村先生は，旧制大学院から東京少年鑑別所に勤務されました。そこでの臨床経験は以後の研究生活に影響を与えたと聞いています。その後日本大学へ戻り，現在の心理学研究室を創設された故渡辺徹先生の指導を受けながら研鑽を重ね，昭和43年に文理学部心理学科教授に就任されました。学究に入られたころは神経質ならびに不安の研究が中心で，米国での研究などを取り入れた成果は，昭和57年の学位論文「顕現性不安の構造に関する研究」に結びつきました。先生の研究スタイルは多岐にわたりますが，「血液型と性格」の研究はその中で最も知られています。心理学者として初めて反対論を展開し，日本応用心理学会での研究発表は第51回大会（昭和59年）をスタートに第81回大会（平成26年）までの31年間，途切れることなく続きました。わが国に広く浸透している信念を学問的に批判したことが大きな話題となり，当初からマスコミに取り上げられ，多くのテレビや講演会に出演するほどの人気者でした。そのような関係もあって，大橋巨泉事務所との契約，日本エッセイスト・クラブ会員など多彩な経歴をお持ちです。また，「県民性」の研究では，全国

すべての地域を網羅しました。途中から浮谷秀一氏 (U) と藤田 (F) が加わって「UFO の会」(O は大村先生) を結成し，行動を共にさせていただきました。米寿まで，毎年学会発表を絶やすことはありませんでした。

大村先生の人脈は広く，国公私立大学を問わず全国に及んでいます。日本心理学会や日本パーソナリティ心理学会でも極めて重鎮な先生でした。日本大学だけでなく，川村学園女子大学，文京学院大学，富士短期大学などでも講義され，先生に教えを受けた学生や大学院生，慕う方は数知れません。笑顔が素敵でお洒落な先生，お酒を好み戦記物に親しむ先生，プラモデルを蒐集する先生，緻密な頭脳と話題豊かな先生でした。

ご葬儀は家族葬でしたので，学界関係者の方々はお別れが叶いませんでしたが，大村先生の人生を振り返りますと，奥様を愛し，お子様とお孫様に囲まれて，幸せな 90 年のご生涯だったと思います。御遺影を眺めるたびに先生との在りし日の出来事が彷彿とさせられます。大村先生の御恩に心から感謝申し上げるとともに，ここに謹んで哀悼の意を表します。大村政男先生，どうぞご浄土よりお見守りください。　合掌

■略歴

1925 年 10 月 4 日　東京に生まれる
1948 年　日本大学法文学部文学科（心理学専攻）卒業，大学院（旧制）に 1 年在籍
1949 年　法務府技官・東京少年鑑別所勤務
1951 年　日本大学助手を振り出しに教育・研究生活に入る
1968 年　日本大学教授
1982 年　「顕現性不安の構造に関する研究」で文学博士（日本大学）
1995 年　日本大学定年退職　日本大学名誉教授
2006 年　瑞宝中綬章の叙勲を受ける

■日本応用心理学会での活動

1954 年　日本応用心理学会事務局員
1970 年　日本応用心理学会常任運営委員（現常任理事）
1995 年　日本応用心理学会認定「応用心理士」認定審査委員会委員長
1995 年　日本応用心理学会名誉会員

■主要著書

1972 年　『異常性の世界　人間関係の精神病理』　帝国地方行政学会
1976 年　『心理学研究法入門　不安研究を実例として』（デーヴィッド・S. ダスティン著，共訳）　東京教学社
1977 年　『心理技術事典』（共編）　朝倉書店
1985 年　『新訂心理検査の理論と実際』（共著）　駿河台出版社
1989 年　『応用心理学講座 10　現代の心理臨床』（共編）　福村出版
1990 年　『血液型と性格』　福村出版（1998 年に改訂版，2012 年に新編が出版される）
1997 年　『NEW 心理学アスペクト』（監修・共著）　福村出版
2006 年　『図解雑学心理学』　ナツメ社　他多数

■主要論文

1957 年　“Taylor's anxiety scale in Japan” Psychologia, **1**, 123-126.
1974 年　子どもの賞罰と性格形成　児童心理，**28**, 4, 30-37.
1978 年　顕現性不安尺度 (MAS) に関する研究—MAS の信頼性について—　日本大学人文科学研究所研究紀要，**21**, 142-150.
1986 年　血液型気質説の回顧と展望　日本大学心理学研究，**7**, 27-43.
2000 年　応用心理学の研究領域におけるアナクロニズムとシンクロニズム　応用心理学研究，**26**, 1-12.
2007 年　「血液型気質相関説」の史的評論—原来復の時代から古川竹二の時代まで—（共著）　応用心理学研究，**33**, 1, 1-12.（以後，2008 年に同論文 II，2009 年に同論文 III が掲載される）　他多数